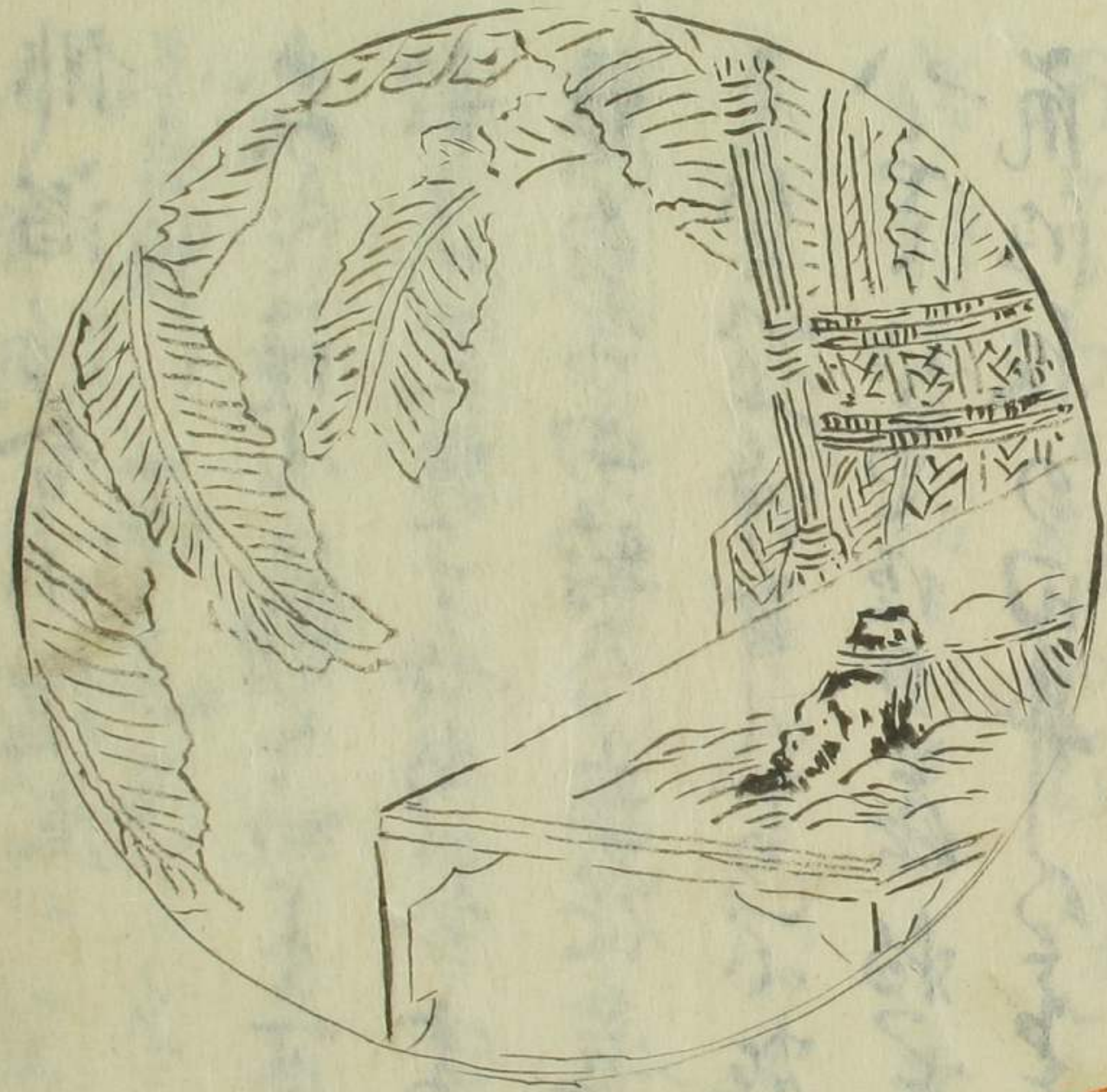


小鏡
 莫多太撰

5
 1721



門
歸
卷
1721



俳諧所合小鏡序

夫と境を相とつての事なるを
れ夫と境を相とつての事なるを
境ある所は特らふ事化造りて
この事なるがの事なるを
ハての事なるの事なるを
流流根の日本



あをうらゝと野あねの詞とわたり
俗語すは語とあひと連なり
もよみはわらわりの事なるを
いふとわらわりの境なるを
老師是とはあひと予
しつゝ小冊子ありて女
書料 西色好く今や
所合小冊子ありと

くわん

雪星觀牛家

安永のちあきま

俳諧所合小切付

目録

- 一 三物と年手 弄りてこゝろの況
- 一 表上中下初中後の年
- 一 所合と後の年
- 一 日回りの年
- 一 朝中の年
- 一 月夜の年
- 一 色字の年

- 一 柳風のしり
- 一 三句月のき
- 一 傍りのり果敢ずら秋取
- 一 雪のうのしり
- 一 序彼急のしり
- 一 竹のしりおちるのしり
- 一 一はまきり一かのき
- 一 虫の白敷のしり
- 一 夜名遠のしり 古今野竹のしり

俳諧の今山境

雪中菴菴多太編

山人牛家著

之を解

を白より月三とと三つわとと
 根し又新才三と三解り
 解しとととととととととととと

一 冬白根才之記之轉合の旨わく各詩は
 格或へ起るとい付は意ゆへ詩へく一也
 むら市へ情と新く十七字、詩へそを白と

春

春の雪 冬 春の雪 冬 春の雪 冬

春の雪 冬 春の雪 冬 春の雪 冬

春の雪 冬 春の雪 冬 春の雪 冬

春の雪 冬 春の雪 冬 春の雪 冬

春の雪 冬 春の雪 冬 春の雪 冬

春の雪 冬 春の雪 冬 春の雪 冬

春の雪 冬 春の雪 冬 春の雪 冬

春の雪 冬 春の雪 冬 春の雪 冬

春の雪 冬 春の雪 冬 春の雪 冬

春の雪 冬 春の雪 冬 春の雪 冬

夏

夏の月 夏 夏の月 夏 夏の月 夏

夏の月 夏 夏の月 夏 夏の月 夏

夏の月 夏 夏の月 夏 夏の月 夏

夏の月 夏 夏の月 夏 夏の月 夏

夏の月 夏 夏の月 夏 夏の月 夏

夏の月 夏 夏の月 夏 夏の月 夏

ちりり〜あ〜門〜に聲

ふまふま〜果は種ふして

秋

修^女吟 芦^眼は穂 寺^{カニ}

吟吟は穂と鳴る夕暮りか

潮あがりかふきの穂のうへ

雪の外の静と湧らねる〜

女^{カニ}のこゝ 秋^眼夜 古^{カニ}所

灰汁桶の音や〜うらまひ〜

仰〜く〜る〜る〜 秋

新米と〜あ〜し〜は月影

油^女草 谷^眼川 砂^{カニ}地

初草のゆいりね地衣の影

青い〜と〜る〜 海。 谷川

虫〜母村の多他〜ゆ〜

を

多^{カニ}の 池^眼村 赤^{カニ}旅人

き〜ね〜と〜い〜は〜ら〜の〜あ〜ゆ〜

む〜や〜と〜い〜風〜の〜も〜た〜ち〜

影の朝〜あ〜る〜川〜

衣箱 （衣箱）

手箱 （手箱）

巾着 （巾着）

手拭 （手拭）

手巾 （手巾）

一 江戸の揚子江の舟に遠く行く舟
下地は地獄皮肉骨の舟なり
舟の形は舟の形なり
舟の形は舟の形なり
舟の形は舟の形なり

舟の形は舟の形なり

舟の形は舟の形なり

舟の形は舟の形なり

舟の形は舟の形なり

舟の形は舟の形なり

尼寺に傳書倫ありて此中
湯庭わらうた尼寺つらほ切先寺のた
の程よりあつて公堂の風行つ

快行ぶりの大つて公堂

腰して將泰より命をす命

三一三三三の勝り中たねよ。南泉より
かんせしとあつ

あつてつてはほつて公堂

あつてつてつてつてつてつて

あつてつてつてつてつてつてつて

おぬおつて

あつてつてつてつてつて

あつてつてつてつてつて

あつてつてつてつてつてつて

あつてつてつてつてつてつて

あつてつてつてつてつてつて

あつてつてつてつてつてつて

あつてつてつてつてつて

あつてつてつて

あつてつてつてつてつてつて

とすまらりつねまきましくらりるまあを
ふくうしんせいのゆりそとと中下
中中なるまきまきあひま

上品

まきまきまきまきまきまきまきまき
しんせいのゆりそとと中下
上品は人ほけふたにけううせ
しんせいのゆりそとと中下
まきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまき

中品

しんせいのゆりそとと中下
まきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまき

下品

まきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまき

まはつ望の都うらまゝとあつて清くあつた
女の宿人なるの死してふとていふぬの心
あつていふる時白くはけりや

初恋

押や〜とてね初恋

中あり〜うつれぬと誓のさし合
る川東の海もあつて〜あつたあつた
あつたあつたあつた中あり海女も〜あつ
りせ千のあつたあつたあつた

父母愛少女 女是聰明子

生不識鴛鴦 繡出鴛鴦是

そあけなほれ

中恋

別れ〜あつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

初恋

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

くわんがらふりてついでに

いかに粉清き、石佛の歌

唾の垂れ流るるを

順調のとてあつた

花陰中りてふい

とてふにわが

新と其由、

所合三儀

一 寄合 ありて新と新向と

一 寸取 ありて新と新古屋実の

一 ちりちり ありて新と枝の

所合四道

一 轉 ありの人情或は

一 随 ありのなれと

一 放 ありて風ぬき

一 送 ありのなれと

紙中の法

一 色葉紙に

三條の
寄合

はりの物の中とあることいふは、
行末とて、海におぼあゝの大船ののり、
のり、はりの物とあることいふは、
海におぼあゝの大船ののり、
可と地、はりの物とあることいふは、
はりの物とあることいふは、
向と出、はりの物とあることいふは、
はりの物とあることいふは、
も、はりの物とあることいふは、

白、はりの物とあることいふは、
はりの物とあることいふは、
肉、はりの物とあることいふは、
はりの物とあることいふは、

附、はりの物の

糊、はりの物とあることいふは、
はりの物とあることいふは、
はりの物とあることいふは、
はりの物とあることいふは、

うろろ眼を閉くあるはのちとをさむと
すう之月可眼のわらむやそりしや

秋と清く夏とくこきま

師のくまふくもまのちりしそと捜ふ
まごまらあわのうとつあゆとくたまの

わ川といわゆとまふ折入とを捨てまじし

かか ちかまののちそくま

わさくくひえく思つてふゆ

か 所は思ふをぬいりし

か 膚くそとまらる秋の風

わくく細うりしうとま

か 所は思ふをぬいりし

か ま川くまゆやうるの日のれ

縮まうしもつれい刺力

か 所は思ふをぬいりし

か ちのちほのわらりたさう

刺れつてくぐたむの九十九

か 所は思ふをぬいりし

か ころそく物を取く亭ま

か 板はすうちくま

海解へてあつていふ

船行りする時わらぬまの目

うらみもあつていふ

海に影もくさつていふ

地は浮き足もいふ

雲を解く海舟のそら

海に海舟もあつていふ

あつていふ

あつていふ

あつていふ

月夜の事

一 月夜の事

あつていふ

あつていふ

あつていふ

あつていふ

あつていふ

あつていふ

あつていふ

あつていふ

かくはゆきさどしむの詠句に寝ぬかたは月
みまの心は月の心赤子のうらみふふあつち
らひ金持やうらむ

おきくしそくもそめ目

柳淋し蒸るく花の神法

折ら高砂うらむむの月の心七希も
かゝ情も女人のあつちをさとして愛も
あゝはゆきて席上皆舌と吐せ
酔ひとくそくくさあつち
昔もさ花の詠と書と有

そと花糸の舞はくはゝあつちの歌人と詠
くはあつちとむの一字を月へ向せし花の
巴都の序よふ今夜とあつちを

花のさくは花もあつち

ほろあつちとむの歌の詠

うらみあつちあつちあつちあつちあつち

ほろあつちあつちあつち

ねの望まうし我新

月と千一は月更ら酒

折ら心体の後花もあつちあつち

海老のついでに

夕月けりよらるる幸とて

昔のついでに

海老のついでに

海老のついでに

海老のついでに

海老のついでに

海老のついでに

海老のついでに

海老のついでに

口とありて二月終

海老のついでに

海老のついでに

曲家其行の書ありて

もは

海老のついでに

海老のついでに

海老のついでに

海老のついでに

海老のついでに

新水とてさる小房麻と翁の所とてさる
け麻にまゝもの社ありあゝとそら良むよりの鹿
あゝとてさるあゝとて新くよひく社まのり
花を折るむゆゑとてあゝとてさる
けり名人のあゝとて新水の社まのり

色字の社

一 二十人修む日冬可折るさる小房白此はま
ふも何の眼を閉く物中一画とてさる
画の字就るあ人半の上とあゝとて新の
とて新の中は画の中の折るさる

あゝとて新のあゝとて新の
らあゝとて新の
あゝとて新のあゝとて新の
あゝとて新のあゝとて新の

初の子とて新のあゝとて新の
流に白のつとて新のあゝとて新の
遺却細湖新白馬驕不行と少年行り
倚石を飾りてあゝとて新の
とて新のあゝとて新の
衣袂あゝとて新の

七色の風染も彩色もあまを飾のこころ人
も耳へもあま

白よ

縷白くもあまのこころ

あまのこころあまのこころあまのこころ

紅よ

あまのこころあまのこころ

あまのこころあまのこころあまのこころ

あまのこころあまのこころあまのこころ

あまのこころ

あまのこころあまのこころ

あまのこころあまのこころあまのこころ

あまのこころあまのこころあまのこころ

あまのこころあまのこころあまのこころ

あまのこころあまのこころあまのこころ

あまのこころあまのこころ

あまのこころ

あまのこころあまのこころ

あまのこころあまのこころ

あまのこころあまのこころあまのこころ

老のなやいりては事いひてはししくかの極言
ものやわらひては事いひてはししくかの極言
物いひては事いひてはししくかの極言
ことばはまは一人物責をとりてはししく
まはしひては事いひてはししくかの極言
あはれは事いひては事いひてはししく
はししくかの極言の一言はししく

この目録

一 物合のなやいりては事いひてはししくかの極言
あはれは事いひては事いひてはししくかの極言

この目録は事いひては事いひてはししく
あはれは事いひては事いひてはししく
はししくかの極言

この目録は事いひては事いひてはししく
あはれは事いひては事いひてはししく
はししくかの極言
この目録は事いひては事いひてはししく
あはれは事いひては事いひてはししく
はししくかの極言
この目録は事いひては事いひてはししく
あはれは事いひては事いひてはししく
はししくかの極言

口を以てして 吟しをを流

いふは所を、侍りしん又或席めて宗祖を
く悲莫悲兮生別離樂莫樂兮新相
知いつをこりうく

旅のうらりと何ははくし

あしはそを、別とあへん小 宗祖

あしはそを、別とあへん小 宗祖
あしはそを、別とあへん小 宗祖
あしはそを、別とあへん小 宗祖
あしはそを、別とあへん小 宗祖
あしはそを、別とあへん小 宗祖

蓮の細や、まをとうもを

まをとうもを、まをとうもを

一 まをとうもを、まをとうもを
まをとうもを、まをとうもを
まをとうもを、まをとうもを
まをとうもを、まをとうもを

序 破 息 入 事

一 まをとうもを、まをとうもを
まをとうもを、まをとうもを
まをとうもを、まをとうもを
まをとうもを、まをとうもを
まをとうもを、まをとうもを

名所の形をてあしむるに似る事と云ふ
て判とてしむ程の事なり神一音の音
と云ふ事なり

神の事なり

一 支那の神の事なり神の事なり
なり

支那の神の事なり神の事なり
なり

支那の神の事なり神の事なり
なり

支那の神の事なり

一 支那の神の事なり神の事なり
なり

支那の神の事なり

一 支那の神の事なり神の事なり
なり

宗祖宗長
の事なり

とし 煮る ちやちや 一巻 いたし ちやちや ちやちや

飯 名 ちやちや の ちや

一 端のいとちやちや 例

ちやちや の ちやちや ちやちや の ちやちや

ちやちや ちやちや ちやちや ちやちや ちやちや

一 日ちやちや ちや

ちやちや ちやちや ちやちや の ちやちや

ちやちや ちやちや ちやちや ちやちや

一 日ちやちや ちやちや の ちや

ちやちや ちやちや ちやちや の ちやちや

あ ちやちや ちやちや ちやちや ちやちや

一 端のちやちや ちやちや ちやちや

ちやちや ちやちや ちやちや ちやちや

ちやちや ちやちや ちやちや ちやちや

一 日ちやちや の ちやちや

ちやちや ちやちや ちやちや ちやちや

ちやちや ちやちや ちやちや ちやちや

一 端のちやちや ちやちや

ちやちや ちやちや ちやちや ちやちや

ちやちや ちやちや ちやちや ちやちや

一 眞れおの字のもの

おくれおを 大お 重お 内お 外お
お 尾お 多お 思お 召お

一 を於 押 會 の

お 桶お 小桶お 男お 小男お 折お 千折お
お 赴お 趣お 面白お

一 うの字とじい 漬ふのもの

うの 馬お 鳥羽玉お 梅お 埋木お

一 りい書うの字のもの

入声のういふ
日かいはるう

うの 祀お 燭お 法お 立席お

お おお おお おお おお

一 中のえのほもの はこぶ

中のえい 中お ゆお ゆお ゆお ゆお
おお おお おお おお

一 眞の五りいもの

おくれおを 声お 家お 末お 杖お 杖お 右お 右お 左お 左お

一 中のわいもの

中のわい おお おお おお おお

雲井 紅 田居 椎柴

其字も持も伝名はあり

そあつて五音の外のまゝ

くわわのそそのわわのそ

右のゆ

さくいしうまは伝名

明間軽重安

ヤスキ
ヤスク
ヤスイ
ヤスレ
ヤスウ

あつてめしうよひのこはて
書なしはかひんあつて
けきいしうまは伝名

歌心

葵太

さくいしうまは伝名

ふたつふは伝名 牛家

い供奉い牛あつて

燧うつとをわさつ 太

月くさし旅のやまの一本元

流のうらふ秋の川 家

三枝伝とまはさし凡の伝 太

ち書そのつる月あつて 家

寒入りも年もそろそろ秋かゝ

酒者^驗上物さくねあつと

早ハハ云々言はす片頃

前より早う五月までと申

富つちも中部仰白の集積

はるく地へ江戸の運為

洲より唯踏く四つと

甲へささあめのおろし入る目

花衣 服く増聖のあつ裸

己食の所かふる芝

太

家

太

家

太

家

太

家

太

、

酒癖の世にさかしく的確

師の、中に囁詫のれ

かゝりしを急る雲入る

帯をくくると侍を解く

昔後のを虫に遊り刻とさ

一厥 園白く 麦の夕暗

修村の車之收の早くと

とあつちも早と路中今を

お争つし別とそまを神聖

とあつちも早と路中今を

家

太

家

太

家

太

家

太

家

太

地を以て所のうらな

家

法言 孫の帰るの状

判於くを龍角力けり

太

じ、授けらるの法を

家

そこの扱の二書と

太

そんがまゝの扱

家

花梅の節まゝの扱

家

あつらひの扱

批業

あつらひの扱

あつらひの扱



